



何気ないことば「方言」

私は、元々神戸の生まれで、縁あってこの大好きな加古川に暮らしています。1984年(昭和59)に加古川の県立高校で教員としての勤務が始まった時、語尾の部分が「〇〇け」という播州弁に遭遇した時、文化の違いを感じたことを今でも鮮明に覚えています。

さて、兵庫県は、全国的にも珍しく5つの旧国(摂津・播磨・丹波・但馬・淡路)から成り立っています。したがって、兵庫県内のことばも、多様なものとなっています。神戸の人が播磨に来ると、きつく聞こえるとか、但馬の人のイントネーションには特徴があるとかなど、身近に感じる部分が多くあるはずです。

ここからは、元甲南大学の橋幸男先生の『ひょうごの方言』(神戸新聞総合出版センター、2004年)を参考にさせていただきながら、進めていきたいと思えます。

方言は、大別すると、東国方言と西国方言に分かれます。播磨弁(播州弁・播磨方言)は、西国方言の近畿方言に属し、さらに兵庫県方言、その内、摂丹播淡方言、さらに細分化されて摂丹播方言、播磨弁となります。

次に、いくつかサンプルをあげながら、ご紹介したいと思います。

「べっちょない」=大丈夫、「ごうわく」=腹が立つ、「こまい」=小さい、「すんにやろかい」=するやろ、「てーてって」=連れて行って、「めんどい」=みっともない、「らく」=都合がよい、「ぶいぶい」=コガネムシなどが有なところ。以下のものは、例文があった方がわかりやすいと思われるので、例文を示して紹介します。

「さくい」「さくい煎餅やなあ。手でつかんだらばらばらと割れよるがな。」もろい、引き裂けやすい・すぐ割れるという意味。

「しわい」「歯が悪うなって、固いものが噛めまへん。特にするめのようなしわいものがあきまへんのや。」粘りや柔軟性があるって固い状態をいいます。

「せからしい」「せからしゅうなってきましたな。」せき立てられるようで気ぜわしい・焦るような気持ちになっているという様子をあらわす言葉です。

「やばたい」「そんなやばたい格好をして打ったら、ボールが前に飛ばへんやろ。」弱々しい・危なっかしいという意味で使います。

ことばというものは、その背景となっている地勢や文化などさまざまな要素が複合的に影響し合って現代にまで引き継がれています。加古川北高校も本年創立40周年を迎え、新たなステージへジャンプアップしますので、今後も今までと変わらぬご支援をよろしく願います。